

トランプ氏はなぜ人気があるのか？

——暴言王トランプが支持される文化的背景を探る——

中橋 友子

Why is Trump Popular?:

The Search for the Cultural Background of the Popularity of Abusive Trump

NAKAHASHI, Tomoko

Abstract

Now many Japanese people don't know the reason why abusive Trump is so popular in the US.

I assume that for some people he is the "hero", who can quickly solve many problems piled up in the US now. I search for the cultural background of his popularity in this thesis.

抄 録

多くの日本人は、暴言を吐き、敵を作るトランプが、アメリカで人気を博す理由について理解に苦しんでいる。私はその理由について、現在アメリカに山積している様々な問題を一刀両断に解決してくれる「ヒーロー」を、人々が求めているからだという仮説を立てた。

アメリカにどんな文化的な背景があり、そのようなヒーローが求められているかを、本論文において探っていきたい。

キーワード

トランプ (Trump)、人気 (popularity)
カウボーイ (cowboy)、レトリック (rhetoric)
ネイティヴィズム (nativism)

はじめに

「トランプみたいな奴がなぜ人気があるのだろうか？」そう考えられた方は多いと思う。

彼は暴言を吐く。あらゆる人を罵倒し、それでも尚人気がある。いや、だからこそ人気があるようにも見える。

では、ジョン・ウエインはどうか？ カウボーイの代名詞と言えるジョン・ウエインを見て、「なぜ人気があるのかわからない。」と言う中高年男性は少ないのではないだろうか？

例えば、「搜索者（1956）」（引用34）でのジョン・ウエインの台詞はこうだ。

——1868年、（南北戦争後3年経過）が舞台。最初のシーン。兄の家に帰ってきたイーサン（ジョン・ウエイン）

兄「カリフォルニアはどうだった？ How was California?」

イーサン「知るわけないだろ。How should I know?（世話になるのに、横柄。）」

兄「でもモーズ・ハーパーが（おそらく昔からの親友）……………」

イーサン「モーズ・ハーパー？ あいつまだ生きてんのか（字幕）!? Is that old guy still creaking around? 直訳：あの年寄りまだくたばってねえのかい？」

ジョン・ウエインがこんな暴言を吐いて、観客は嫌がったか？ 否である。観客の多くは面白がり、懂れた。

ある種の人々にとってトランプは、ジョン・ウエインなのである。私はそう仮説を立てた。彼らはトランプを、アメリカと自分を窮地から助け出してくれるカウボーイ（ヒーロー）と思っている。

なぜそう言えるのか。ここでは、①アメリカ現代社会に様々な問題が山積し、②だからこそカウボーイのような人間の登場を人々は待望していたことを、アメリカ文化の視点から論じてみる。

1. 人々が大統領に望むこと

そもそも、アメリカの人々は、大統領をどういう風にとらえているのか？

アメリカ国民は、大統領を「最も尊敬する人物」に選ぶことが多い。「最も尊敬する人物」は誰かという「世論調査」の結果では、1978年の1位が、カーター大統領であり、1981年、1983年、1984年の1位はレーガン大統領である。（森, 2014, p.65-67）（引用26） 宗教史研究者の森孝一氏は、この結果をもって、「アメリカ国民は『大統領職』に政治的役割以上のものを期待している」と分析する。それは国民にとっての「精神的中心」としての役割であり、アメリカを統合する「象徴」としての役割と分析している（同, 67）（引用26）。

また、アメリカ史研究者の松尾式之氏は、万が一大統領が「社会生活の規制のみにこだわったり」とすると、「後世の歴史家は彼のことを「カリスマ」のない人物と評することになる。大統

領らしい大統領としては、ごくあたり前の人間くさい人間が全てを統括してる様子を国民の前にぜひとも示して見せねばならないのである。」(松尾, 1993, p.151) (引用27) 大統領には、人間くさい、普通の人であることが期待される。

その点トランプは、経済的に成功した有名人ではあるが、難しい言葉は使わず⁽¹⁾ 普通の人に見える 経済的な成功についても、金儲け指南書本を著し、読者に「俺でも頑張ればなれるかも」と思わせるところがある。反面、普通の人のように失敗もする。結婚3回、倒産4回を経験している。また多くのアメリカ人と同じようにキリスト教を信じ、「良き家庭人」に見える⁽²⁾。

実際の大統領選挙も、結果的に国政に長く携わってない、「普通の人に近い人」が頻繁に選出されている。

- ・カーター大統領……前職はジョージア州知事
- ・クリントン大統領…前職はアーカンソー州知事 (その前職は弁護士)
- ・オバマ大統領……前職は上院議員 (ただし1期。その前職は弁護士)

候補者側もまた、いかに自分が普通の人であることをアピールする⁽³⁾。

大統領として選ばれるには、「普通であるというイメージ」が大事なのである。

アイオワ州デモインの初老の男性「トランプは政治家じゃないのがいい。」

(「ザ・リアル・ボイス」) (引用41)

政治家ではなく、普通の人に見えるトランプは、従って人気である。

またアメリカ人が、普通の人を大統領に選ぶその根底には、「エリート嫌い」という性向があるからと分析する思想家も存在する。詳論は後述する。

2. 普通の人怒り

しかし、そんな漠然としたエリートへの反感以上に、実際にここ何年かの間に、エリートが、自分達と自分達の国に対して行なったことに人々は憤慨している。

ウォール街で金融工学を駆使したエリートが、ある金融商品を作った。それは貸した債権を分割して、新たな商品にし、有効活用しようという知恵だった。それは債権を持っている人々に喜ばれ、大手投資銀行も格付け会社もそれを信用し、皆で相乗りした。しかし、その商品はもともと、信用力の低い住宅購入者等（本来金を貸してはいけない人）に貸し付けた債権であった。そ

(1) 小学生レベルの英語と言われる

(2) それを演出するため、家族（特に娘）を壇上に上げる。

(3) ヒラリー・クリントンは、夫が大統領選挙に出馬する時点で、彼女は既に有能な弁護士として活躍しており、主婦業はほぼ行なっておらず、敬意も払っていなかったと見え、ある時、「クッキーを焼くより大事なことがあるのよ。」とカメラの前で失言した。これは専業主婦の反感を買い、このままでは夫の当選は難しいと判断し、その後報道陣の前でクッキーを焼いて見せた。最近も普通の人と同じように、彼女が酒場でビールを飲む様子がSNSに公表されていた。

して、それが破綻した。それがリーマンショックである。

いわば、「クズみたいなローンの山にきれいなレッテルを貼らせ」(Lewis, 2016, p.415) (引用28) て売り、それが破綻したのだ。しかも、破綻時に全容を理解している人間は、ウォール街の中にもほとんど存在しなかった。

ワシントンは庶民を救うより前に公的資金を投入し金融機関を救った。実に、リーマンが破綻した翌日、連邦準備制度理事会は、損失を出したAIGに対し即座に融資を決定。これとて元は納税者の金である。その後、アメリカ政府は正式に金融システムの損失を、全て引き受けた。大手銀行のオーナーは注がれた公的資金で、法外と思える額の「自分のためのボーナス」を確保していた。

公的資金投入は、アメリカを助けるためとエリートは言う。銀行がつぶれば路頭に迷う人は更に増えるというのは正論かもしれないが、一般国民には納得がいかない。なぜなら、こんな大失態を招いても、エリートの中でこの件で責任を取る者はいなかったのである。またこの件に関連し訴追された者も、重要でないポストに就く一人にとどまった。

ウォール街が責任を取らなかったことに加え、この件での法改正すら無かった。当然ながら人々は、ワシントンもそれに荷担しているのではないかと不信感を抱く。

それに比べ、庶民の生活はどうなったか？ 資金繰りに困った企業は倒産したか人員整理を行った。今までつましく生活してた人々から、職も、保険⁽⁴⁾も、家も奪っていった。リーマンショック以降、職・家を失った人は、それぞれ数百万人以上と言われる。

アメリカでは、ローンが払い終わるまで、住宅の所有権は金を貸した銀行側にあるため、支払いが数ヶ月滞っただけで、即座に家を追い出されることが多い。一旦ホームレス化すると職を探すのも非常に困難になる。住所不定の人間に定職を与えてくれる企業は希であるからだ。また家も職も無くなると、自尊心は傷つく。病気になっても誰も助けてくれない。這い上がるのは至難の業だ。

アメリカの普通の人々、特に中所得層は、「明日は自分が転げ落ちるんじゃないか」という不安におびえている。事実、この40年でアメリカでは「中間層は、60%から50%に縮小している」とIMF専務理事のLagardeは報告する(米 PBS ニュース) (引用42)。

3. オバマ政権への怒り

オバマは就任以来、実績を上げてきた⁽⁵⁾にも関わらず、支持率がそれほど高くない。共和党支持者(反対政党なので高くないのは当然だが)が支持しない理由の一つは彼が進めてきた「文化多元主義」「多文化主義」にある。

「現在の共和党支持者の中核をなす南部の白人層にとっては、それほど多様で

(4) アメリカでは当時国民皆保険が無かった故、解雇になった途端に無保険になる人が多かった。

(5) オバマの就任時の失業率：20%から、現在は4%に下がっている。またオバマの支持率は2016.7月時点で弱冠回復。50%は超えている)

ない小さな町こそが「本当のアメリカ」のイメージです。しかしオバマ氏はアフリカ系であり、多様性やコスモポリタン、進歩的な精神といったものを代表しています。共和党の中核層から見れば、オバマ政権は自分たちの信じるアメリカを変えようとしているように映るのです。」(Leonard Steinhorn (米アメリカン大教授) 朝日新聞) (引用51)

オバマは、自らの生い立ち⁽⁶⁾の影響もあってか、多様な文化を尊重し、その上で国を統一することを試みた。しかし、それは保守的な人々にとっては、望んだ変革ではなかった。そしてこの「共和党支持者の中核層をなす保守的な南部の白人」こそ、トランプ支持層に重なる。

彼らの信じる宗教はキリスト教である。アメリカでは伝統的にキリスト教、それもプロテスタントが主流を占めてきた⁽⁷⁾。アメリカは、多様な人種・文化を抱える民主主義国家として知られているが、事実上「キリスト教国家」である。キリスト教を信じ進化論を否定している人々も存在する。

日本人にはあまり知られていないが、「大統領就任式は大祭司の就任式でもある」(森, p.52) (引用26) し、TVでの大統領のスピーチは「God bless America」で締めくくられる。

主流派は自分たちの生活様式こそ、真に「アメリカ的」だと思っている。そういった保守的な人々は、アメリカ的かどうかということに固執し、「非アメリカ的」な異教徒が国内に増えることは好ましくないと考える。このことについては後述する。

シェールバブルがはじけた後、イスラム系の移民が大量に押し寄せてくるテキサスの田舎町でも、新移民に対する不満が高まっている。

白人中年の男性「キリスト教徒が寛容であれと言われすぎた。自分の信条を強く押し出せとは言われず育った。」(この人は食事前に祈っていた。)

同じ中年男性「ハッピーホリデー (という呼び方) は止めて堂々と“クリスマス”と呼ぶべきだ (クリスマスと呼ぶことも控えるようにと言われている)。アメフトの試合前にこっそり祈るんじゃなく。それで刑務所行きになってもいい。』

同じ中年男性「公立学校ではキリスト教徒のお祈りも許されてない。イスラム教徒にはお祈りの部屋があり許されるのに。」

(「ザ・リアル・ボイス」) (引用41)

レーガンが人気だった理由として、彼がキリスト教徒であり、「古き良きアメリカ」(キリスト

(6) アフリカ人の父と白人の母を持ち、インドネシア・ハワイで育つ。

(7) 森孝一氏によれば、プロテスタント、カソリック、ユダヤ教、ギリシャ正教、モルモン教など「キリスト教の類いの宗教」を信仰する人々は、全人口の87%にも及ぶという。引用「宗教からよむアメリカ」p39)

教や家族・結婚)の価値観を主張したことがあげられると、森孝一氏は説明する。アメリカでは60年代～70年代、ベトナム戦争や公民権運動、ウォーターゲートなどによる政治不信などから、主流派に反対する「対抗文化(カウンターカルチャー)」が台頭した。しかしレーガンは、80年代、対抗文化にさらに対抗するべく保守的な人々を鼓舞したのだ。彼が強調したのは、アメリカ社会の保守化、カーター政権への不満、「神のもとなる国アメリカ」への危機意識である(森, p.213)(引用26)。

トランプはこのような保守的なキリスト教徒の心をもつかんだ。

テキサスのキリスト教徒の中年男性「トランプも言ってたな(別の中年男性「イスラム教徒入国禁止だとね。))。僕らは立ち上がるべきだ。学校や政府に対して“おかしい”と言うべきだ。行動をするべきだと思う。」

(「ザ・リアル・ボイス」)(引用41)

そして現在の移民への不快感は、宗教的・文化的な軋轢のみならず、現在世界各地で発生している「テロ」への恐怖となって現れる。保守的な為政者達もそれを煽る⁽⁸⁾。テロリストが入国する可能性があるにも関わらず、オバマは人道的という見地から、難民移民の入国を推進している。保守的な田舎町では、それは恐怖と認識される。そしてそんな輩から身を守る手段としても有効と共和党支持者達が考える「銃」に対し、規制しようとしているオバマへの反発がある。

老人男性A「誰かが突然入ってきて、銃の乱射をするかもしれない。だから皆が銃を持ってたら気分がいい。銃があれば机の下に潜らなくても、そいつを撃ち殺せる。銃があれば守れる。」

老人男性B「銃規制は、逆に善人から銃を奪う。犯罪者だけが銃を持つ結果につながる。オバマは憲法を改正しようとしている。何のためかわからんが。」

老人男性C「(我々)市民は銃を持つ権利がある。合衆国憲法修正第二条。憲法は守られるべき。第二次大戦後しばらくはこの国は自由だった。自由を重んじる国だった。今の政府はやり過ぎ。政府は私達から銃を奪おうとしている。この国は変わってしまった。国の精神が変質しようとしている。」

——以上3件、バージニア州 グレトナ 2007年に銃乱射事件が起きたバージニア工科大学の傍。住民の80%が銃を所持する地域—— (「ザ・リアル・ボイス」)(引用41)

銃の権利を主張する人々にとっては、規制は到底受け入れられるものではない。今回も共和党

(8) テキサス州知事は「テキサスは難民受け入れを拒否する。市民の安全について妥協は出来ない。」と述べ、クルーズ氏は「難民に紛れてテロリストが入ってくる！」と煽った。

の多くの大統領候補者が銃を持つ権利を守ると約束していた。

銃愛好者達は言う。「銃はただの道具に過ぎない。斧やシャベルと同じだ。使い方次第で良くも悪くもなる。」この言説は映画シーンで使われたものである。大統領選挙の度に銃の所持が選挙の争点となるが、共和党保守派の擁護者・NRA（全米ライフル協会）は未だにこの言説を繰り返し、共感され一定数の票を確保している。また、力の弱い女・子供が暴漢に襲われた際でも、銃があれば「平等に」戦えるとする考え方もある。銃の所持は、自由の概念や個人の権利と結びついて、影響力の強い文化を形成している。

NRAの代表が先日このようなことを述べていた。

「アメリカ国民には、神に与えられた“自らの身を自分で守る権利”があります。銃はそのために有効な手段です。（フロリダのテロが）銃のせいだと言うような政治家は報いを受けるべきです。」

(Chris Cox (NRA Executive Director) 米ABCニュース) (引用43)

アメリカ人にとって銃は「単なる武器ではなく精神的な思い」（渡辺, 2012, p.122）（引用29）がこもっているものであり、手放せない人は多い。

また、オバマは民主党支持者にも高い支持率を誇るわけではない。その主な理由は、「決められない政治」を行なっているからだと言われている人は多い。

「理想は語るが、議会对策といった“根回し”が足りない」（朝日新聞）（引用52）。「頑固で、議会に敵しく、対決姿勢に終始」（Elaine Kamarck（ブルッキングス研究所）「問われるオバマの6年」）（引用44）。

しかし決められないのは、オバマだけの責任ではない。オバマの実績は多岐にわたる⁽⁹⁾。成立した法案が少ないのは、実は共和党の戦略でもあった。「共和党としては、有権者がワシントンに好感を持つことを防ぎたい。だから大統領が実績を上げることとをとにかく止めなければ」という意図があったとNorman Ornstein（AEI）は指摘する（朝日新聞）（引用53）。

しかもこの共和・民主の二極化した中での対立傾向は、この20年で進んでいる現象であり社会の構造的な問題である。この二極化の背景には、経済の悪化という問題がある。

それに比例して格差も広がっている。94年と比べ、下位20%の人々の所得は4%減っている。上位5%の所得が15%増にもかかわらずである（ピューリサーチセンター：引用 朝日新聞）（引用54）。そして両党とも、「自分たちの不満を、対立する互いの政党のせいにしてている」（高橋弘行NHK解説委員「問われるオバマの6年」）（引用44）のだ。

(9) オバマケアは「小さな政府」を望む共和党からは反発を受けたが成立した。銃規制・移民制度改革・最低賃金引き上げは共和党の反対により不成立。地球温暖化対策は、それにより事業縮小を迫られる石炭業界から反発を受けた。

4. ヒーロー登場

この二極化を背景に、オバマと議会の膠着状態は続いた。そこへ現れたのがトランプである。勇ましく、暴言でも堂々と発言するトランプは、理想は語るが実行力に乏しいオバマに苛立つ人々に、新たな望みを持たせた。

アイオワ初老男性「トランプが議会とどう戦うのか見てみたい」

アイオワの中年男性「今のムチャクチャな政府と戦ってくれる候補に投票するよ。それが出来るのはただ一人。トランプさ。」

(「ザ・リアル・ボイス」) (引用41)

多方面に渡ったオバマ政権への不満が人々の中にあった。そこにトランプが現れ、人々は飛びついた。彼はわかりやすい「敵」を示した。イスラム教徒、メキシコ不法移民、ワシントンの既成政治家、マスコミ、ウォール街。何となく偉そうな人々や、なじみのない文化圏の人々である。

サウスカロライナの中年女性「私達のために立候補してくれて本当に素晴らしい！ 毎日起きて“夢みたい”って思うの。」

(「ドナルド・トランプのおかしな世界」) (引用45)

この発言からも彼のイメージが、ある種の人々には、現状を打破してくれるヒーローとして映ったことが推察される。この発言の時点でトランプは具体的な政策を未だ発表していない。それでもこのような発言が出るということは、彼があくまでイメージ先行だということを証明するものである。

金髪碧眼で堂々たる体躯。敵対する勢力や人をなじる荒々しい言葉。彼は、昔映画やTVで目にしたヒーローに似ている。暴言を吐く姿すら、中高年の保守的なアメリカの人々にとっては、カウボーイ映画で見慣れた光景である。人々が彼に親近感を覚えても不思議はない。「自由に西部の原野を駆け回り、多くの困難や危険を克服したカウボーイはアメリカ人の理想の男性である」と英文学者の鶴谷は論じる(鶴谷, 1989, p.264) (引用20)。

実際、アメリカの人々は為政者をカウボーイに見立てることが多い⁽¹⁰⁾。アメリカの保守的な人々は昔も今もカウボーイが大好きだ。

こうして、不満へのはけ口は過激なヒーローの形で現れ、人々は喝采を送った。

(10) レーガンはカウボーイ映画やドラマに多く出演した。大統領就任後もサービス精神と自己アピールのため時折カウボーイハットをかぶっていた。ブッシュも911以後、カウボーイハットを頻繁にかぶり、「rogue (ならず者)」、「dead or alive (生きてようと死んでようと捕まえる)」と、敵対する国や人に対してカウボーイ的な言動を繰り返し、圧倒的な支持を得た。

5. カウボーイとは何か？

カウボーイについて論ずる前に まずアメリカ人にとっての西部とはどういうものかという説明が必要であろう。

アメリカの国民性を語る上で、不可欠なのが西部である。西部開拓（フロンティア）精神は、アメリカの発展の原動力であり、国民性形成の一翼を担ってきた⁽¹¹⁾。事実多くの政治家などが、自分や国家のイメージを国民に訴えかける際、開拓の精神を持ち出すことは珍しいことではない。未開の地を自らの手で開墾していくことはアメリカ人にとって過酷ながらも誇らしい作業であり、他の未知のことに乗り出す際にも頻繁に例えられる概念である。

西部劇につきものなのがカウボーイだが、その実態は我々が映画で見るとは異なる。

カウボーイ業は、悪党と撃ち合いをする仕事ではなく、牛肉需要に応えるための「牛追い」である⁽¹²⁾。鶴谷によれば、賤しい仕事とされ、決して人気のある職業ではなかったという（鶴谷, p.57）（引用20）。

そんなカウボーイがヒーローに祭り上げられたのは、まず19世紀のダイムノベル（三文小説）である。都会で働く労働者達カウボーイは人気を博した。ほとんどは「ほら話」の類いだが、忙しい日常を忘れたたい大衆にとってはひとときの夢であり、荒野を駆けるヒーローが魅力的に映った（小鷹, 2000, p.58）（引用19）。

そしてカウボーイが国民的英雄になったのは、ハリウッド映画である。ハリウッドでは最初期から西部劇が製作され人気を博したが、最も量産されたのは、1950年代、すなわち冷戦の時代である。その時期が重なったのは偶然ではない。

西部劇映画は、アメリカ文化の神話やイデオロギーを体現している。19世紀の開拓時代の話を、主流派の側から解釈が行われ「物語」が作られている。そもそも西に開拓を進めた行為も主流派にすれば「神から与えられた使命（マニフェスト・デステイニー）」であり、宗教的行為である。

アメリカは50年代のこの時期、公民権も確立されておらず、未だ白人キリスト教中心主義文化のまっただ中であった。その主流派の価値観と映画の中の理想の世界は一致している。この時期の西部劇中では、「アメリカ的なもの（キリスト教、資本主義、民主主義など）」が善とされ、善玉は白人カウボーイだった。そして非アメリカ的と考えられた有色人種や異なる宗教（例えばインディアン）や文化が悪であった。アメリカ文化研究者のMaidmentと Mitchellは、アメリカの素晴らしさがアメリカ映画と一緒に宣伝され、同時に“非アメリカ的なものが敵”という考えも、50年代西部劇と一緒に“宣伝”されたと分析する（Maidment & Mitchell, 2000, p.120）（引用9）。政治と映画界がタッグを組んだのである。

(11) 1893年にターナーが、そして他の知識人も同様のことを論じており、この考えは多くの支持を得ている

(12) カウボーイは現在も少数存在する。また黒人やアジア人のカウボーイも存在した記録も残っている（引用：鶴谷壽「カウボーイの米国史」p51）。

従って、戦意高揚などの意図を持って製作された作品も少なからず存在した⁽¹³⁾。

多くの戦意高揚映画も、大衆は拒絶するどころか受け入れ、多くはそれに歓喜した。そこには、大衆の心や願望も反映されていたからという側面もある。そうして「アメリカの素晴らしさ」は国内外に宣伝されていった⁽¹⁴⁾。

Slotkinは「西部劇映画は、アメリカ国民の神話・イデオロギーを伝える道具となった」、そして西部劇映画それ自体が、「神話の場所」となり、「偽の歴史」となっていったと論じる（Slotkin, 1998, p.232, 234, 254）（引用12）。ハリウッドという装置を使い、国民の支持を得て、カウボーイは神話となっていく。宗教社会学者のBellahは、アメリカが生んだ最も神話的なヒーローがカウボーイであると言う（Bellah, 1996, p.145）（引用13）。西部劇やカウボーイは、主流派の神話としてイデオロギー強化のため利用されたのだ。

映画と大衆社会は影響し合う。「冷戦時に映画で強化されたイデオロギーは現実社会に影響を与えた」（Slotkin, 1998, p.365）（引用12）。西部劇映画によって作られた「偽の歴史」は人々に刷り込まれ、次第に「常識」となってゆき、現実生活に影響を及ぼしていく。ガンマン同士の撃ち合いなどは、実際は極めて少なかったようだが、そういう映画を見て育った人々の中には、映画が真実であったと信じる人が存在する。現実の社会でも、善悪二元論（白人・キリスト教・資本主義が善、異民族・異教徒・共産主義が悪）が当然視され、そこでは、彼らの「正義」のためなら、映画同様、暴力も肯定される。また、ベトナム戦争時、ジャングルから飛び出してくるベトコンを、アメリカ人兵士はインディアンになぞらえた。映画の世界を信じ切っている人々には、「敵」の概念を考える時、インディアンを持ち出すと理解が容易で、罪悪感も持たないですむからである。

60年代初頭までは、映画の中において、白人男性が常に正義、有色人種が悪者という構図は変わらなかった。従ってそういった西部劇を見て育った世代には、当時の価値観を信じ続けている可能性は多いにある。

トランプの言説は当時の正義に則っており、彼が当時の映画ファン達から正義の味方と思われるのも不思議はない。トランプ支持者には中高年の保守的な男性が多い。西部劇映画を見ていた世代と一致する。

しかし、西部劇は1960年代後半になり、現実のベトナム戦争のリアルさがTVで伝えられるようになると、人気は減速していく。アメリカ兵が無辜のベトナム人を殺戮する様子を茶の間で見ると、国民は戦争に大義を感じられなくなる。劇と現実の間に矛盾を感じていく⁽¹⁵⁾。

時を同じくして60年代から公民権運動が高まり、全ての人種の人権・多様な文化への配慮が社会に浸透していく。そうなるまでアメリカが唱えてきた白人中心主義は果たして正しかっ

(13) この時期に代表される映画スター、ジョン・ウエインは当初、自ら志願して戦地に向かおうとする。しかし、実際の戦争に行くより、彼が映画出演の方が国民の士気が上がると周囲に説得され、入隊を断念。そして入隊の代わりに「俺がアメリカだ。」という強い愛国心を持ち、映画製作に臨んだと、後にインタビューで答えている（引用「MOVIE 2007」p3）。

(14) 日本においてもアメリカの素晴らしさは、映画やテレビドラマで宣伝されていく。日本においても未だにジョン・ウエインのファン、当時のドラマのファンだという中高年男性は多い。

(15) その後ベトナムから帰還した元兵士達も、英雄ではなく、さげすみの対象となっていった。

たのかという検証がなされるようになり、「多文化主義」が広まっていく。そうやって西部劇衰退は加速していった。

しかし、実は西部劇のヒーロー＝カウボーイは消えたわけではなかった。

彼らは、「アーバンカウボーイ（刑事）」に姿を変え、1970年代も、80年代も生き延びた⁽¹⁶⁾。

そして80年代、前述したように、レーガンを大統領に迎えたアメリカは再び「強いアメリカ」を標榜するようになる。60年代、70年代、政治や社会に対する不信感が満ちていたアメリカは「ヒーロー不在の時代」と呼ばれたが、その頃傷ついたアメリカ人の自尊心が復活を求めている。それは同様の人々が多く存在する「今」に似ている。

6. アメリカが求めるヒーロー像

Slotkinは、カウボーイ像の特徴として、「美德を携え、善良で正しく、男っぽく、誇り高く、頑固で、強く、暴力の扱いに長けた、白人男性」(Slotkin, 1998, p.243, 250, 251) (引用12) という項目を挙げている。まさにジョン・ウエインの演じるカウボーイ像だ。この特徴は驚くほど、メディアで見せるトランプ像と一致する。トランプとカウボーイ像の類似点を、トランプ自身の著書および、側近や近くにいた人々の証言から挙げていく。

6.1. 美德を携え、善良で正しい

ニュース報道などで彼を見る限り我々日本人にとっては善良とはほど遠い人物にも映る。しかし（主にアメリカの田舎の）、ある種の人々にとっては彼は「善人」なのである。

美德①金持ちである

——サウスカロライナ州ロックヒルの床屋——

床屋「トランプはいい人ですよ。大好きです。経済力があるから自分のやりたいことは何でも出来る。他人の金を無心しない」

——サウスカロライナ州のトランプ政治集会支持者達——

初老の男性「大好きだよ。政治家じゃないから、しがらみがないから人の言うことなんて気にしない。大金持ちであることも強みだよ。うるさいロビイストの言いなりにならない。」

——アイオワ州オタムワの集会——

「金儲けの天才だからね。雇用を生んでくれるし。寄付が要らないのはトランプだけ。（金があるから）マスコミに操られないし。」

(「ドナルド・トランプのおかしな世界」(引用45))

金が要らない＝クリーンと支持者は考える。クリントンはウォール街から巨額の寄付を受けており、彼らにとっては悪役である。

しかし実際、トランプは過去に4社を倒産させてきて、「負債は他人に押しつけてきた」「つぶ

(16) 「ダーティハリー」のハリー・キャラハンや「ダイ・ハード」のジョン・マクレーンがそれである。

すには大きすぎる借金で助かった」とRandall Lane (Forbes編集者))は述べ(引用45)、その分「投資家・従業員・年金基金に入っている労働者が痛手を被った」とTimothy O'Brien (伝記作家)は分析(引用45)する。過去には、従業員や社会のことは考慮していなかったようである。

また、彼の言動と経済力から「アメリカに雇用を生む」ことが期待されているが、トランプタワーで販売している「トランプ製品」は、そのほとんどが人件費の安い外国で製産された物であり、国内雇用を生み出した実績は無いに等しい。

しかし金持ちであるということには、アメリカでは文化的に尊敬される傾向が強い。

「アメリカの反知性主義」を著したHofstadterはその著書の中で、「アンドルー・カーネギーの時代の偉大なビジネスリーダーは、少々に憎まれてはいても文化的英雄であった」と述べている。19cのフォードの頃まで、こういった金持ちは近隣住民から相談を持ちかけられる賢人であったというが、彼以降の金持ちは徐々に英雄的なイメージから遠ざかっていったという(Hofstadter, p207, 231) (引用8)。

しかしそれでも「アメリカは本質的にビジネスの国である。」(政治家ハーディング 1920の発言) アメリカのビジネス界の大立者は一般的に広く社会で崇められている。それは、「彼ら(ビジネスリーダー)の主張が非常に多くの点で伝統的な庶民の知恵に合致していたからである。」(Hofstadter, p209) (引用8)。

また、働くということは、アメリカ主流派の人々にとって、本来宗教的なことでもある。

美德②よく働く

「勤労の大切さを知るように育てられた」(Trump, 1988, p90, 91) (引用30)とトランプ氏は述懐する。しかしこれは彼に限ったことではない。多様化が進んだとはいえ、(主流はプロテスタントの)アメリカでは、勤労が尊ばれることが多い。

Max Weberは、著書「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の中で、「出来高が一番良かったのは、敬虔派の宗教教育を受けた少女であった」と自身の論文での調査を公表している(Weber, 1997, p.68) (引用7)。

そして勤労の結果、獲得した貨幣も祝福されるものだ。WeberはBenjamin Franklinの言葉を引用し、「貨幣の獲得は……有能さの結果である」(同, 48) (引用7)と述べる。結果として、「近代的企業における資本所有や企業家についてみても……彼らがいちじるしくプロテスタントの色彩を帯びているということがわかる。」(同, 16) (引用7) 有能さ、即ち金持ちであることはプロテスタント信者にすれば神から選ばれている証なのだ

トランプは再三、著書の中で「私は取引が好きだ」(Trump, 1988, p.25) (引用30)と繰り返す。取引は彼にとって「仕事」である。金の為でなく、好きだから仕事をしているという。現代のアメリカ人皆が宗教の為に働いているわけではない。その後「富そのもの」が人々の勤労の目的となり、今やその富も憎まれてさいるのだが、勤労を尊ぶ文化が完全に滅びたわけではない。働きの者であることを自他共に認める彼が、嫌われる理由はそこにはない。

美德③世話好き

トランプ自身が、「私は難しい人間ではない。良くしてくれた人には、こちらも良くする。」

(Trump, 1988, p82) (引用30) と述べているとおり、面倒見のいい人間であるようであるが、あくまでそれは、彼に「良くした」人間に限られるのかもしれない。

トランプの著書「敗者復活」を翻訳した小林龍司氏は、「18000人いる従業員を……路頭に迷わせることがあったら、私は二度と自分の姿を鏡に映して見ることが出来なかつたはずだ」と述べるトランプのことを面倒見のいい人間と分析している (Trump, 1997, p. 303) (引用31)。しかし前述のように、4社を倒産させ負債は他人に押しつけ、投資家・従業員・年金基金に入っている労働者が痛手を被ったことから、自己分析ほどには従業員や社会のことは考慮していなかったようである。

美德④反権力

西部劇やアーバンカウボーイ映画にはよく、「反権力」ヒーローが登場する⁽¹⁷⁾。

今回のトランプ旋風でも、ウォール街やワシントンを罵倒するトランプに対し、人々は喝采を送った。そして彼ら大衆が「反権力」「反体制 (エスタブリッシュメント)」に傾いているということが頻繁に言われた。

この考えはどこからきているのか？ 反権力が尊ばれる理由として、ヒーローはコミュニティの「外」にいて、そのコミュニティを守ってくれなければならないからだと Bellah は論じる (Bellah, p.146) (引用13)。ヒーローの粗野な行動は文明化された社会にはなじまない。しかし、それは社会の中には、腐敗した権力から社会を守れないからであるという。社会から離れたところで俯瞰し、外から守ってくれる。そこに彼らの存在意義があるのだ。また西部の神話では、以下のようなヒーローの特徴も見いだされる。それはヒーローにおいて、「正義は法より優先する」 (Slotkin, 1998, p.147) (引用12) ということだ。

スロットキンは、「アメリカの天才は民主主義に反する立場をとる」 (同, 175) (引用12) と論じる。これは古典的西部小説「Virginian」の作者、Wister の言葉を引用しているもので、さらに彼は「生まれながらに資格を有する支配階級の前では、民主主義は価値を成さない」 (同, 178) (引用12) と選民思想的なイデオロギーの存在を明かす。西部の神話では、立派な人物の行う「正義」が法に優先する事態は、往々にして生じる。

この考えはどこから来るのか。新約聖書のローマ書13章1～4節のところに「この世の権威はすべて神が作った。正義の為に政治権力はある」という記載がある。法も制度も政治権力である。法や制度よりも正義の方を重んじる背景にはこのようなキリスト教の思想があると考えられる。そして、例えば法が守れずとも、キリストを信仰すれば救われるという教えを信じる者が多数存在するのだと宗教社会学者の橋爪は指摘する (橋爪, 2005, p.40, 41) (引用21)。そういった信仰心が、彼らの考える「正義」を、そしてそれを推し進めるヒーローの行動を、後押ししているのかもしれない。

また反権力の中でも、いわゆる「知識人」を攻撃するのは、前述したようにアメリカでは知識

(17) 50年代の、「真昼の決闘」、70年代の「ダーティハリー」。80年代のダイ・ハードも、主人公がFBIから機銃掃射されていたシーンを考えれば、これに含まれるのかもしれない。街の権力者や保安官が「悪者」になった90年代の「許されざる者」もそうである。

人が嫌われる傾向があるからともいえる。例えば1950年代のマッカーシズム（赤狩り）の時代、マッカーシー本人は知識人だけを狙って怒りを爆発させていたわけではないが、「マッカーシーの支持者は知識人攻撃をとくに歓迎しているように見えた」（Hofstadter, p.1）（引用8）とHofstadterは報告する。

こういった考えはアメリカに限ったことではないし、アメリカでも知識が尊ばれることはある。しかし、一般的にはアメリカ人は「思想は第一義的に実用的であるべき」と考える傾向がある⁽¹⁸⁾。Hofstadterはそういった実用的（プラグマティック）な思想の傾向を「反知性主義」的傾向としプロテスタンティズムの遺産であるとする（同, 49）（引用8）。彼はさらに、実学重視で教養を重視しない傾向は、たたき上げの成功神話（アメリカンドリーム）の根底にある「自助の精神」の影響だとする（同, 223）（引用8）。

知性がどういうものかということについては大いに議論の余地があるだろうが、アメリカ人が実学重視で、自助の精神を持ち、考えたらすぐに行動に移す傾向については、TurnerやTocquevilleも指摘している⁽¹⁹⁾。

トランプは、聴衆の前ではあたかも西部を開拓してきた人間のように振る舞い、わかりやすいことしか言わない。しかし実態は、たたき上げと言うには彼はあまりに裕福で、良い教育も受けてきた。Hofstadterは、「たたき上げがなくなったのは、ビジネススクールが出来たからだ。ウォートンスクールのような」（同, 230,231）（引用8）と述べていたが、皮肉にもトランプは、そのウォートンスクール出身である。また著作を読めばわかるが、トランプ氏はかなりのインテリで、趣味は読書、哲学書もよく読む。

しかし彼は、「インテリなのにブルーカラー（労働者階級）の話し方をする」とトランプの元・選挙参謀、Sam Nunberg氏は語る。（「クローズアップ現代プラス」）（引用46）のである。それはひとえに、「彼が最も投票して欲しい人たちが「その層」であることを認識しての戦略である」と見える。知性やエスタブリッシュメントを嫌悪している層に対してアピールするため、相手に合わせて言動を変えている。エリートのビジネスマンの彼は、聴衆の好みを学習し演じ、そうやって票を伸ばしたと考えられる。

6.2. 男っぼい

Slotkinは、「西部のヒーローはいつも男らしく、野生の中に喜んで入っていく」そして「自然（野蛮）を征服する」と言う⁽²⁰⁾（Slotkin, 1994, p.64）（引用11）。

Tocquevilleはアメリカのような平等な社会では、階級がないことから、「人々はだんだん礼儀

(18) Hofstadterは、アメリカで1950年代に大変人気のあった福音主義者のビリー・グレアム氏が、「魂を欠いた頭でっかちの教育が行われるなら、世界中に広がる中途半端な教育は、無教育より遙かに悪い」と言って絶賛を浴びたことを例に挙げる。

(19) Turnerの描写する西部の人間像は、「便法を素早く発見するあの実際ので独創的な気質、芸術的志向には欠けるが偉大な目的を達成する力にあふれた、具体的な物事に対するあの優れた把握力」（引用：森岡「アメリカ文化のサブプリメント」p65）（引用23）であるし、アメリカ人は、学問については「現実ですぐに応用できるものだけを取り入れる」（Tocqueville, 2000, p58）（引用1）というプラグマティックな知性の持ち主ということもTocquevilleも指摘している。

(20) この場合の野蛮は、当時のWASPの意識では、動植物のみならず、インディアンも含まれる。

正しくなくなり、その結果、性格がより単純で男らしくなる。」「そして他人に注意を向けなくなる。」と描写する。(Tocqueville, 2000, p705) (引用1)。ぶっきらぼうで礼儀知らずな、しかし男っぽいヒーロー像は、まさにジョン・ウエインの演じるカウボーイ像だ。

冒頭で紹介したが、ジョン・ウエインの出演する映画では、ヒーローは誰に対しても乱暴な口をきく。そういう仕草を男っぽいと憧れたファンも多い。中西部や南部の田舎などでは、そんなジョン・ウエインは今でも中高年男性に人気である。

暴言はジョン・ウエインに限らない。ダーティハリーもダイ・ハードも暴言映画だ。

<ハリウッド映画 暴言集>

①ダーティハリー (引用37)

——連続殺人犯から殺人予告が来た後、市長の部屋で警察上層部との会議中——

市長「誰が担当だ？ (ハリー) キャラハンを呼べ。」

キャラハン部屋に入ってくる。

市長「報告しろ。(Let's have it.)」

キャラハン「何を？ (Have....what?)」

市長「現状をだ。何してた？ (Your report. What have you been doing?)」

キャラハン「字幕：1時間近く、外の控え室にいました。(I've been sitting on my ass in your outer office waiting for you.)」注：Sit on your ass! = 引っ込んでろ！ ass = くそ！ 注：ここは日本語字幕では「ただ外の控え室にいた」とおとなしいが、実際はかなり汚いスラングを使っている。

上司「よせ、ハリー。市長になんて口を！」だから当然上司も怒る。

②ダイ・ハード (引用38)

——映画の最初の方でジョン・マクレーンが、奥さんの会社が回してくれたリムジンの運転手アーガイルに、「何で奥さんと一緒にロスに来なかったんだい？」と聞かれた時の答えも汚い言葉のオンパレードである。——

ジョン「俺はNYの警官だからだよ。俺には、6ヶ月分、ブタ箱に入れなきゃいけないクズどもの始末がたまってるんだ。(‘Cause I'm a NY cop. I got a six month backlog of NYscumbags. I'm still trying to put behind bars.)」backlog = やり残した仕事、scumbags = (卑語で) 人間のクズども、put behind bars = 牢屋に入れる

——一旦呼んだ 911が帰って行く時も、「Oh, you stupid mother fuckers! No! No! Turn the fuckin' truck around! (ああ、ばかやろう！違う、違う！くそトラック、戻ってきやがれ)」

また暴言を吐くには、昨今の事情として、「注目されるためにはより過激な表現が用いられます。その結果、以前であれば問題視されたような侮蔑的な言葉が特に政治では当たり前になっています」とNorman Ornsteinは指摘する(朝日新聞)(引用53)。

6.3. 誇り高い

子供の頃、自分の主張と相容れない音楽の先生の目に、黒あざをこしらえたこともあると自伝

で述べている。トランプ氏本人は、「先生が音楽のことを知らなかったので腹が立った」(Trump, 1988, p.92) (引用30) と述懐する位、プライドが高いことがわかる。他にも、「私は決して他人になめたまねはさせない。」(Trump, 1997, p.75) (引用31) と述べている。

6.4. 頑固

彼は、「小さい頃から、物事に敢然と立ち向かい、非常に強引なやり方で自分の考えをわからせようとする傾向があった」(Trump, 1988, p. 92,93) (引用30) と述べている。

また「頑固さは仕事するのに大切な要素だ」(Trump, 1997, p.3) (引用31) とか「どちらかというガードが固く、冷たく、ちょっと偏執狂的な人が結局最後には最も成功している」(同, 274) (引用31) と頑固であることを良いことであると、本人は喧伝する。

しかし、トランプ氏自身が実際に頑固とはいえない。政治集会での主張は度々変わる。また彼は、「私はたった一つの取引、たった一つのアプローチだけで仕事をする事ができない。常に沢山のボールを持つようにしている」(同, 31) (引用31) と述べているように、複数の選択肢を持つのがポリシーだ。客の要望に応じてサービス内容を変更するのはビジネスマンの常である。それは頑固者とは言えず、そのイメージを演じているだけの可能性が大である。

6.5. 強い

強いアメリカ。共和党支持者の男性はこのポリシーが大好きであり、強いアメリカを標榜したレーガンは未だに人気である。一方、軍事費を削減しシリアへの空爆をためらったオバマは「弱腰」となじられ、そのことがイスラム国の台頭を許したと非難される。そうして「米国の威信が傷つくことへのいらだち」(朝日新聞) (引用55) を共和党支持者達は感じている。強くないアメリカ、偉大でないアメリカを彼らは許せない。

一方のトランプは、「アメリカはお金がない」故、日本などの同盟国を守るのはやめ、日本へ相当の負担を強いるようとしている。ただ「勝てる戦争はやる。」と息巻いている。この部分に共感する支持者は多い。トランプはその事をよく知っており、彼自身も勝つことが好きである。

「私は負けず嫌いで、法の許す限り、勝つためなら何でもする」(Trump, 1988, p.125) (引用30)

「私は勝つ、勝つ、常に勝つ」(トランプネイション：ドナルドトランプの美学 引用：Millstein, p.176) (引用32)

勝つことに執着し、何度も窮地に陥りながらも、以前以上にビジネスを大きくした。彼はとにかく勝ちたいのである。

また、「敵にしたら怖い人です」と言う知人もいる。「話が合っている時は愉快な人ですが、聞きたくないとなると豹変する」と元証券アナリスト、Irving Rothman氏は分析する (引用45)。彼はトランプ氏のせいで会社を解雇された人間だ⁽²¹⁾。

(21) Rothman氏がトランプ氏のカジノ経営が行き詰まることを予測した後、トランプ氏がFAXで抗議。彼に謝罪、または解雇を求め、そうしなければ裁判を起こすと脅す。彼は解雇されたが、カジノは倒産した。

6.6. 暴力の扱いに長けた

ビジネスを軌道の乗せるのにはきれいな事ばかりではすまされない。特に彼が活躍しだした70年代のマンハッタンはギャングが力を持っていて、彼らと対峙したトランプは、

「人間は基本的にあくどい生き物です。気をつけてないと食べ物にされてしまいます。」

「気がかりな連中がいるんだ。厄介なことになる前に圧力をかけてくれ。」

(以上「ドナルド・トランプのおかしな世界」)(引用45)と話している。

しかし共和党支持者の多くは、こういう性向を嫌いではない。彼らは、「適切な時に暴力を用いないと、事態はもっと面倒になる」と信奉しているリアリスト達だ。前述したように、イスラム国の台頭にしても、もっと早い時期に適切な対策を取れば叩きつぶせたと信じている者は多い。

6.7. 白人男性

カウボーイの代名詞とも言われたジョンウエインは白人であった。前述したように、1950年代まで、ほぼ全ての西部劇ヒーロー（その多くはカウボーイ）は白人男性であった。それは当時の社会の主流が白人男性であったことを反映していたわけだが、時代は変遷し、現在は白人中心に社会が動いているとは言えなくなってきた。

「トランプ支持の中核は、生活の苦しい労働者階級、中・低所得層だ。貧困は不法移民のせいだと思い、本来アメリカは白人が主人公であったはずなのにいつの間にか自分たちは」と疎外感に悩む人々であると久保文明（東大教授）は分析する（朝日新聞）(引用56)。そして「かつて社会の主流であったはずなのに「白人であること以外、よりどころがない」と中山俊宏・慶応大学教授が分析するように（朝日新聞）(引用57) 自尊心が傷ついた人々である。かつてなら「白人」というだけで優位に立てた労働者階級（その中でも特に中・低所得層）の人々には、この国を作ってきたのは自分たちだという自負がある。なのに自らが中心にいけないう現状への不満がある。そこに登場したのがトランプ氏であり、彼を支持しているのはそういう人々たちである。

「(トランプ氏の) 支持者は白人・非大卒男性の労働者が多い。(自分たちは) 黒人と同じかそれ以上に差別されてると感じている。社会に取り残されてると感じている。負け犬と虐げられてる。その怒りを声に出して、自分たちが必要とされてると再び実感させてくれる人を求めている。皮肉にもこの大富豪が自分たちの代弁者と感じている。」

(Scott Hoffman (米世論調査専門家)「ドナルド・トランプのおかしな世界」)

(引用45)

今回の共和党の予備選挙の最初の20州のうち17州で、トランプ氏は非大卒者から圧倒的な支持を得たことはデータでも証明されていると人口動勢専門家のRonald Brownstein氏は述べる（米PBSニュース）(引用45)。

初老の女性「トランプはアメリカを1950年代に戻したいのよ。白人男性が全てを支配していた時代にね。」

—マサチューセッツ州 ボストン郊外 ノーサンプトンで—

(「ザ・リアル・ボイス」) (引用41)

「既存の政治家から、のけ者にされてきた人を(トランプ氏は)ターゲットにしてきた」(Matt Frei (ジャーナリスト)「ドナルド・トランプのおかしな世界」)
(引用45)

言い換えれば、このトランプ現象は、白人男性ということでは優越感を持ってない人々の逆襲なのである。彼らにとっては、トランプの行動・言動は自分たちの鬱憤晴らしであり、だから彼の支持は大きくなる。または人口比率も下がってきている白人達の危機感の表れとも言える⁽²³⁾。おそらく、トランプがアメリカを1950年代に戻したいのではなく、「トランプ支持者達が」戻したいのだ⁽²⁴⁾。

しかし、メキシコ人・イスラム教徒を嫌うのは、地方の労働者階級だけではない。

「演説の、“レイプ魔(メキシコ人が)”のくだりを聞いて、一気にトランプの大ファンになった。あの移民政策は、他の政治家には真似できない。彼に神のご加護がありますように。」

(Ann Coulter (女性保守系政治解説者)「ドナルド・トランプのおかしな世界」)
(引用45)

異人種・移民・外国人を嫌う人々は比較的裕福な人々の中にも存在する。

アメリカはWASPが主導権を握ってきており、「アメリカ的」なものとしてきたのはWASPの価値観、生活様式、文化であったことは前述した。そして「WASPから外れるものはWASPのアメリカ人による排斥の対象となった。」とアメリカ史研究者の有賀夏紀氏は言う。そして、こういう態度(ネイティヴィズム)は、「そのときどきで強弱もあったが、アメリカ社会の底流として今日まで続いている。」(有賀, 2002 p47-48) (引用14) としている。トランプ氏が煽っているのは、このネイティヴィズムである。

有賀氏はこうも論じる。「特に経済が悪化している時は、移民は低賃金労働者として攻撃された。」(同, 48) (引用14) 「移民の労働者は白人の労働者の脅威とされ、労働組合は19世紀後半、移民制限の運動を展開した」(同, 49) (引用14)。過去においては、黒人、白人でもプロテスタントでない宗教の人々(ユダヤ人やイタリア人、ポルトガル人)、そして中国人、日本人が差別の対象となった。第二次大戦中の日系人も強制収容所に送られている(同, 49) (引用14)。

「前の世代ではアジア系が責められました。それ以前はヨーロッパ移民がそうでした。イタリア系やアイルランド系です。それが今はラシーノに起きている。アメリカの歴史では何ら新しいことではないのです。経済が悪くなると移民がやり玉に挙がるのです。」とヒスパニック系政治研究者のガブリエル・サンチェス、ニューメキシコ大准教授も同様に論じる(渡辺, 2012, p.91-92) (引用29)。

まさに、トランプ氏によって引き起こされている、今の現象である。現在はトランプにより、メキシコ不法移民が敵視されているわけだが、現実には、彼らがアメリカ人から仕事を奪い尽く

(22) 2040年には、白人が人口の半分を切ると言われている(朝日新聞 2016. 8.2)

(23) 彼は以前インタビューで人種差別主義者のことを嫌悪する旨の発言をしていた(2000年)

しているわけではない。むしろ、メキシコ不法移民は、アメリカ人が嫌がる3Kの仕事を引き受けたり、ベビーシッターや家政婦として助かっている場合が多い。「アメリカは労働力を移民で補ってきた」とHoward French 元NYタイムズ上海支局長は分析する（米PBSニュース）（引用48）。勿論、有能で勤勉な移民は活躍している。

しかし「メキシコから入ってくる人より、帰国する人の方が多い」というデータすら存在する（Bruce Stokes氏（米調査機関ピュー・リサーチセンター 引用：朝日新聞）（引用58）。季節労働が終われば、国境を越えて帰っていく人も多く、多くのアメリカ国民がメキシコ不法移民と仕事を奪い合っているわけではない。

安い賃労働を不法移民と奪い合うアメリカ人は少数で、高度な知識を必要としない単純労働従事者である。むしろ多くのアメリカ人から仕事を奪っている人間の大半はアメリカ人自身であり、企業がコスト削減のため海外に拠点を移し、大量の失業者が発生したことが過去に何度もあった。

入国するイスラム教徒にしても、事実誤認がある。アメリカで起きたテロは、アメリカで生まれ育った若者達によるホームグロウンテロである。

しかし入国するイスラム教徒に対する（主に共和党支持者の）人々の恐怖心や不信感は大きなものがある。2016年6月にフロリダオーランドでイスラム系の若者（アメリカ生まれ）が起こしたナイトクラブでの銃乱射事件に関しても、「48%の人が、今回の事件はイスラムのテロリストのせいだと思っている」とKristen SoltesAnderson氏（ワシントンエグゼクティブ）は分析する（米ABC「ジスウィーク」）（引用49）との報告がある。真実でもないにも関わらず、誰かを敵視する。こういった考えがまかり通ってしまうのは、これらが、ある種の人々の不安を代弁しているからである。

心理学者のカーコフとバックは、人間には、漠然とした不安を、何とかして証明可能な恐れに転換したいという衝動があると分析する（Glassner, 2004, p.27）（引用33）。トランプの人気のポイントであり同時に最大の問題点はこれであると見る。すなわち、人々が未だ明確にしていなかった不満や不安を拾って言葉にし、恐怖の対象を目に見える人々に転化したことである。

また人類学者M. Douglasは、「人間は自分が属する社会の基本的なモラルに反することや目障りな相手への批判を正当化してくれるものを、危険な要素として選択する」と論じる（同, 36）（引用33）。人々はそうやって「敵」を作り不安から逃れようとする。その手法で、トランプも明確な「敵」を作っている。

これは今アメリカで起きていることであり、ヒトラーが政権を取った時に、ユダヤ人に対して、ドイツ社会に敵対心を持たせたやり方そのものである⁽²⁴⁾。

「現実があまりにも複雑だと人々は逆にシンプルな説明を好むようになります。何もかも明確にしてくれる過激で単純な論理に。人はわかりやすさに惹かれるのです。例えば民族主義も単純です。敵味方を判別するには“相手に一体感を感じるかどうか”それだけなのです。この論理なら、簡単に“悪者”を決め、

(24) ヒトラーの著書、「わが闘争」は長く発禁処分だったが、著作権が切れ、最近ドイツの「現代史研究所（所長アンドレアス・ウィルシング）」により、注釈版が発表された。この注釈では、「ヒトラーは何事も善と悪に明確に分け、全人類の敵と見なすユダヤ人との闘争をうたった。」とある。（朝日新聞 2016.2.19）

相手に責任をなすりつけ、自分は“正しい側”に身を置くことが出来る。」(政治学者バーバラ・ツエンプフェニヒ 引用：「ヒトラー「わが闘争」封印を解かれた禁断の書」)(引用50)

そのようなレトリックを用いて、人々を煽っているのがトランプなのである。それに気づいているアメリカ国民もいる。

若い男性「たまった社会への不満を移民や変革を目指す人につけている。福祉を受けるべき貧しい人ほど、現在が辛いから、反発も強い。だから誰かにすがりつきたくなる。そこにトランプが来て、“不法移民のせいだ”と言う。そうして一番投票してはいけない人(トランプ)に投票してしまうんだ。」

—ボストン郊外ノーサンプトン—
(「ザ・リアル・ボイス」)(引用41)

7.まとめと考察

トランプ氏という「怪物」が人気を博しているのは、1. 主に地方の保守的な共和党支持者が抱く現状への不満・恐れがあり、2. それを、トランプ氏が演じる(アメリカ保守層の男性達が愛するキャラクター)「カウボーイ」が「退治」してくれるように見えること。3. トランプ氏の用いた「恐怖のレトリック」(漠然とした不満や不安を、「具体的な恐怖」すなわち「イスラム教徒やメキシコ移民への嫌悪感」に変換し、彼らを「敵」とする)にあるというのが私の主張である。

ある日、近所に自分たちの文化と違うやり方で暮らす人々が入ってきて、住みつく。その人達には独自の文化や宗教があり、自分たちの生活様式に合わせてくれる様子はない。そうすると次第に彼らに嫌悪感を抱くようになる。それが今世界中で、移民と住民が抱える軋轢である。これにネイティブイズムが重なったのが現在のアメリカだ。トランプ支持者達は、移民に配慮するよりも、「世界で一番正しく偉大なアメリカの伝統的なやり方」こそが最良の道であると、密かに思っていた。黒人でリベラルで品の良いオバマが説く「移民に優しい世界」は、キリスト教を固く信じる彼ら地方の保守的な白人男性達にとっては、前述したように、耐えがたい変化である。そこに彼らの代弁者が現れた。彼は新移民を敵ととらえた。彼の提唱する過激な世界の方がなじみがある。そこでみんな飛びついた。それがトランプ人気の背景である。

しかしながら、自由に荒野を駆け回り、わかりやすい敵を倒していく映画の中のカウボーイと違い、このトランプカウボーイの手法は、現代社会では無理がある。それは、アメリカが長い世紀をかけてようやく手にした、自由・平等な社会での「統一」を反故にするものである。差別を越えた統合はアメリカの国是である。にも関わらず彼は差別を煽る。

心理学者唐沢は、「人は自分がある集団に属すると認識するだけでその集団の利益の拡大を考え始め、かつ自派が他派に対して相対的に不利になることを嫌うようになる」という(唐沢, p.113)(引用40)。そしてOrnsteinは「自分が所属する集団に絶対的な忠誠を誓う“同族主義”がワシントンだけでなく米国に広がっている」と懸念する(朝日新聞)(引用53)。この懸念は2年前の中間選挙の時になされたものである。そして米国はこの2年でさらに人種・宗教で分断が進

んだ。分断の時計の針を、トランプがさらに加速させ進めてしまった。彼のスピーチを喜んでいるのは、彼を支持する懐古主義者だけであり、複雑な問題を簡単に解決しようとするその精神こそ、トランプ以上に危険である。

支持者達は見た目のイメージだけで、トランプが国内に産業を呼び戻し、雇用まで生み出してくれるスーパーヒーローだと思っている。実態は、自社製品を安い海外で生産させその差額で儲けるビジネスマンにも関わらずだ。「私は何が売れるか知っているし、人々が何を欲しがっているかよくわかる」とトランプは豪語する (Millstein, p.143) (引用32)。だから人気がある。

2016年7月21日の共和党指名受諾演説のリハーサルで、笑顔で彼はこう言っていた。

「メディアの皆さん、愛している。そろそろこれを言ってもいい頃だろう。」彼は顧客が変われば態度を変える。彼を支持する有権者はいずれ裏切られる。

< 引用・参考文献 >

1. Alexis deTocqueville (2000) Democracy in America. A Bantan Classic Book
2. David Dary (1982) Cowboy Culture, New York: Alfred A.Knopf
3. Frederic Jackson Turner (2008) The significance of the Frontier in American History. Penguin 平野孝他訳 (1989)「資料が語るアメリカ」有斐閣
4. John Storey (2001) Cultural Theory and Popular Culture: An Introduction, Harlow: Prentice Hall
5. Judy Giles, et.al. (1999) Identity and Difference Studying Culture: a practical introduction, Oxford: Blackwell,
6. Louis Giannetti (2002) Understanding Movies, 9th Edition, New Jersey: Pearson Education,Inc., 堤和子・増田珠子・堤龍一郎訳 (2004)「映画技法のリテラシー〔Ⅱ〕 物語とクリティック」フィルムアート社
7. Max Weber (1920) DIE PROTESTANTISCHE ETHIK UND DER GEIST DES KAPITALISMS 大塚久雄訳 (1997)「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」岩波文庫
8. Richard Hofstadter (1963) ANTI-INTELLECTUALISM IN AMERICAN LIFE, Alfred A. Knopf, Inc., New York 田村哲夫訳 (2006)「アメリカの反知性主義」みすず書房
9. Richard Maidment with Jeremy Mitchell (2000) The United States in the Twentieth Century Culture, Open University
10. Richard Maltby (1983) Harmless Entertainment: Hollywood and the Ideology of Consensus, London: The Scarecrow Press, Inc.,
11. Richard Slotkin (1994) The Fatal Environment: The Myth of the Frontier in the Age of Industrialization, 1800-1890, Norman: University of Oklahoma Press
12. Richard Slotkin, (1998) Gunfighter Nation, Norman: University of Oklahoma Press
13. Robert N. Bellah, et.al. (1996) Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life, Berkeley: University of California Press
14. 有賀夏紀 (2002)「アメリカの20世紀 (上)」中公新書
15. 大嶽秀夫 (2013)「ニクソンとキッシンジャー」中公新書
16. 亀井俊介 (1991)「ハックルベリー・フィンは、いま」講談社学術文庫
17. 川北稔 (1999)「ヨーロッパと近代世界」財団法人 放送大学教育振興会
18. 北村洋 (2014)「敗戦とハリウッド占領下日本の文化再建」名古屋大学出版会
19. 小鷹信光 (2000)「アメリカンヒーロー伝説」ちくま文庫
20. 鶴谷壽 (1989)「カウボーイの米国史」朝日選書
21. 橋爪大三郎 (2005)「アメリカの行動原理」PHP新書
22. 橋爪大三郎 (2013)「世界は宗教で動いてる」光文社新書
23. 森岡裕一 (2014)「アメリカ文化のサプリメントー多面国家のイメージと現実」大阪大学出版会

24. 渡部 幻（主編）（2013）「70年代アメリカ映画 100」芸術新聞社
25. 渡部 幻・佐野 亨（編）（2010）「ゼロ年代アメリカ映画 100」芸術新聞社
26. 森 孝一（2014）「宗教からよむアメリカ」講談社選書メチエ
27. 松尾 式之（1993）「アメリカン・ヒーロー」講談社現代新書
28. Michael Lewis（2010）THE BIG SHORT Inside the doomsday machine 東江一紀訳（2016）「世紀の空売り」文春文庫
29. 渡辺 将人（2012）「分裂するアメリカ」幻冬舎新書
30. Donald Trump with Tony Schwarz（1987）THE ART OF THE DEAL, Random House 枝松真一訳（1988）「トランプ自伝」早川書房
31. Donald Trump&Kate Bohner（1997）THE ART OF COMEBACK, 訳小林龍司（1999）「敗者復活」日経BP社
32. Seth Millstein（2016）TRUMPISMS 講談社＝編訳（2016）「ドナルド・トランプ、大いに語る」講談社 a 新書
33. Barry Glassner（1999）THE CULTURE OF FEAR, Basic Books 松本豊訳（2004）「アメリカは恐怖に踊る」草思社

映画

34. The Searchers（1956）「搜索者」製作：Warner Bros. Pictures（監督：John Ford）
35. The Big Short（2015）製作：Paramount「マネーショート 華麗なる大逆転」（監督：Adam McKay）
36. 99 homes（2014）製作：Hyde Park Entertainment Image Nation「ドリームホーム 99%を操る男たち」（監督：Ramin Bahrani）
37. Dirty Harry（1971）製作：Warner Bros. Pictures「ダーティハリー」（監督：Don Siegel）
38. Die Hard（1988）製作：Silver Pictures「ダイ・ハード」（監督：John McTiernan）

雑誌

39. Haruo Jin 記事：「伝説のウエスタン・ヒーロー ジョン・ウエイン」[MOVIE]（2007. No.2）共同通信社
40. 唐沢 穰「PRESIDENT」2016.2.15号 プレジデント社

TV

41. 「ザ・リアル・ボイス～“ダイナー”で聞くアメリカの本音～」（2016.3.13）NHK BS1
42. Christine Lagarde 国際通貨基金専務理事 PBS ニュース（2016.6.23）NHK BS1
43. Chris Cox（NRA）ABC ニュース（2016.6.20）NHK BS1
44. Elaine Kamarck/ 高橋 弘行 NHK 解説委員「問われるオバマの6年」（2014.11.3）NHK BS1
45. Matt Frei イギリス ITN/Channel 4 The Mad World of Donald Trump（2016）「ドナルドトランプのおかしな世界」（2016.4.27）NHK BS1
46. Sam Nunberg 「クローズアップ現代プラス」（2016.4.27）NHK
47. Ronald Brownstein アメリカ PBS ニュース（2016.4.7）NHK BS1
48. Howard French アメリカ PBS ニュース（2016.8.2）NHK BS1
49. Kristen Soltis Anderson アメリカ ABC 「ジスウイーク」（2016.6.20）NHK BS1
50. Hitler's MEIN KAMPH a dangerous book ドイツ Broadview TV/ZDF（2016）「ヒトラー「わが闘争」封印を解かれた禁断の書」（2016.6.7）NHK BS1

新聞

51. Leonard Steinhorn 朝日新聞 2014.10.28
52. 山際岳志 朝日新聞 2014.7.13
53. Norman Ornstein 朝日新聞 2014.10.28
54. ピューリサーチセンター 朝日新聞 2016.5.9
55. 朝日新聞 2016.5.8
56. 久保文明（東大教授）朝日新聞2016.3.15
57. 中山俊宏（慶応大学教授）朝日新聞2016.3.1
58. Bruce Stokes（米調査機関ピュー・リサーチセンター）朝日新聞 2016.3.1

